

# 雲りの青空

福井の女性キャリア・相談記

松岡 幸代

三月も終わりのころ、一本の電話が入った。電話の主は四十代半ばのUさん。相談したいことがあるので予約を入れたい、とのことだった。

予約当日。Uさんは、「こんなこと相談しているのでしょうか…」と遠慮がちに話を切り出した。「四月から、社内初の女性管理職に就くことが決まったんですが、どうしてよいのかわからなくて」と困惑顔のUさん。続けて、「上司から急に『これからは部下の面倒も見てほしい』って言われたんです。でも、仕事を終えたら、大慌てで家に帰って家事をこなさなくてはいいし、これ以上仕事が増えるとかやっていけないかどうか…」と肩を落とした。

Uさんの日常が自ら浮かんだ私は、「毎日大変な思いをされていますね。今までも大きな山をいくつも乗り越えてこられたんでしょうね」と声をかけた。Uさんは「そうです。何のために働いているのか分からなくて、何度辞めようと思っ

9

たことか…」。

乗り越えてきたさまざままな山。▽熱を出す子どもを尻目に仕事を優先したばかりに、子どもが緊急入院する羽目になり自分を責めたこと▽母親が倒れ、介護と育児でくたくたになった日々▽子どもの誕生日が会社の決算期と重なり、ろくにお祝いもしてあげられず寂しい思いをさせたこと

などを話してくれた。その目にはうっすら涙がにじんでいた。

「でも、『仕事を片手間にしている』と思われたくないの、手を抜かず精いっぱいやってきたつもりです」。そう言い

切るUさんは、堂々としてとても頼もしい。私には、Uさんの上司が部下を任せたいと思う気持ちに分かる気がした。Uさんなら立派にこなせるはずだ。そう気付いてもらうには、どう伝えたらよいだろうか。

「ずっと頑張ってきたんですね。Uさんなら、きっと次の山も乗り越えられる気がす

るんですが、どうでしょう？」

「そう尋ねてみた。少し考えたUさんに、」

「もう、こうなったら頑張っていくしかないですよ、ね、よし」と、小さくガッツポーズをしてみせた。

「今でも誰にも言わず歯を食いしほって克服してきた出来事をすべて話を

し、「よく頑張ったね」と認めてもらえたと感じて初めて、やる気と自信がよみがえってきたよう

だ。Uさんは相談室を一步出たとたん、ぴたりと足を止めた。さつきは気分がなかつた本棚が目に入ったのだ。「あれ、あそ

この本は自由に読んでもいいんですか？」。そう尋ねるUさんに、「どうぞどうぞ。ここには、女性の『頑張りたい』という思いを応援する本を用意しています。貸し出しもOKですよ」と答えた。

「実は、前からこういう本を読みたかったんです。本屋さんに行ってもどれを読んでもいいかわからないし、それにちょっと気恥ずかしくって」と肩をすぼめながら話すUさん。そして、うれしそうに笑みを浮かべながら、キャリアアップに関する本を手にとった。

「でも、仕事を終えたら、大慌てで家に帰って家事をこなさなくてはいいし、これ以上仕事が増えるとかやっていけないかどうか…」と肩を落とした。

「い、と本を参考にすることは恥ずかしいことでも何でもない。本を手にしたUさんは、来所したときとは一転して、すがすがしい表情で帰っていった。

(福井新聞社提供)

## 昇進、仕事増に困惑

# 本音打ち明け 自信回復



イラスト・多田くにお